

ねらいと概要

第41回大会でのパネルディスカッションは、「語り」をとりあげた。「語り」あるいは「ナラティブ」の研究は、言語学、文学、歴史学、人類学、精神医学、心理学等の諸分野で個別または諸領域の間で学際的に行われ、近年、特に学際的研究が注目されている¹。これらの分野では「語り」を扱う用語や概念が必ずしも一致、共有されているわけではない²。「語り」をテーマに議論するには、「語り」の定義、研究対象の範囲をすり合わせておく必要があるが、これを厳密に行うことは困難である。そこで、ここでは緩やかに、小説、手紙等をも含む、言語により一定の構造を持つて他者に向けられたものを「語り」とした。

「語り」は「だれが」「どう」語るかが問題となるが、「だれ」は文学における「声」の問題、「どう」は認知言語学での「視点」の問題となる。

「話者が事態をどの視点から捉えるか」は認知言語学での中心の問題であり、そこでは話者の事態の捉え方を「主観的把握」と「客観的把握」に二大別し、様々な言語における現象の分析から、「主観的事態把握」の傾向が強い言語と「客観的事態把握」の傾向の強い言語があること、事態の捉え方をめぐっ

て言語と文化に「相同性」があること等が明らかにされている³。「視点」の問題を考える時、「主観」「客観」のあり方は重要な切り口となる。

これを踏まえ、本パネルディスカッションでは「語り」について、それが誰によつて、どのような視点から語られるのか、あるいはどのような視点から「語り」を捉え得るのかをめぐり、学際的な対話を模索すべく、言語学、文学、教育学の立場から4人のパネリスト（沼田、白川、宮澤、西 ※発表順）が以下の発表をし、フロアを交えて討論した。

沼田は広島、長崎の原爆被爆者の体験談話を資料に、そこに見られる言語現象の詳細な分析を主軸にして記憶の継承と言語の関係を説明しようとする研究プロジェクトを紹介した。これを通して、「話者」と被爆体験談話の具体的な言語現象の関係の概要を示した。

白川は同じく被爆体験談話を資料として、話者の心理的側面の一端が終助詞「ね」の出現のあり様から捉え得ることを具体的に示した。

宮澤は「語り」の研究で、主観的な「語り」をいかに客体化し、客観的に捉えるか、そして客観的な分析結果を研究者の独

沼田 善子

創的観点即ち主観で記述するかについて、具体的な研究事例により示した。つまり「語り」の研究手法の観点からの「主観」「客観」の考察である。

西は空海の書簡に見られる書儀表現の特徴を、その独創性と汎用性の観点から考察することを通し、平安初期の漢文書簡での、類型化された表現による意思疎通の実態を示した。この時期の漢文書簡における書儀受容のあり方から、表現主体の独創性に着目して「主観」のあり方を考えた。

註

- 1 福沢将樹 (二〇一五)、郡仲哉・都築雅子 (二〇一九) 等
- 2 藤本 愉 (二〇〇三・44)、奥田恭士 (二〇一六)
- 3 池上 (一九八二) 等

引用文献

池上嘉彦 (一九八二)「表現構造の比較―(スル)的な言語と(ナル)的な言語」『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』大修館書店、67

―110―

奥田恭士

(二〇一六)「なぜ今ナラティブ?か―その現状・背景・問題について」『兵庫県立大学環境人間学部 研究報告』18号 67―76

郡 仲哉・都築雅子

房

(二〇一九)『語りの言語学的／文学的分析』ひつじ書

福沢将樹

(二〇一五)『ナラトロジーの言語学―表現主体の多層性』ひつじ書房

藤本 愉

(二〇〇三)「語り研究における「共同性」の検討」『北海道大学大学院教育学部研究科紀要』90、43―69